

多様な共食会話における摂食行動の分析

傳研究室 4 年 佐貫里花

共食場面で、参加者の関係性の違いによって、摂食行動に違いがあると考えた。

○先行研究

團 (2018) は、発話と嗜好品の摂食行動の両立に着目して分析した。この研究から多くの参加者が、自発話と摂食行動を両立するために、他者の発話中に嗜好品摂取を終了して自発話に備えようとする事がわかった。

武川ほか (2011) は、友人同士の会話を楽しむことを目的とした共食場面において、咀嚼と発話を同時に行う参加者の様子が見られたことから、共食会話では円滑な会話を優先する傾向があるとした。また、大皿と銘々皿の食事形態の違いに着目し、大皿での共食で発話が多くなるとわかった。

○本研究の目的

多様な関係性を持つ参加者の共食会話を観察することで、関係性の違いによって生じる摂食行動の特徴の違いを見つけることである。

○対象データ

『日本語日常会話コーパス』から、3名以上の参加者がいて、共通参加者（以下協力者）が登場する共食会話を抜粋した。そこから、協力者と他の参加者の関係性が異なる3データを選出した。

協力者の摂食行動、摂食行動中の参加役割、対象データ内全体時間の参加役割を、ELAN を用いてアノテーションした。摂食行動は、協力者が食べ物（飲み物）を箸などで掴んだ瞬間から、箸が口から出るまでを1単位の摂食行動とした。参加役割は「話し手付近時」「聞き手時」「発話なし時」に分類した。

○定量分析 1

目的

協力者が会話中に摂食を多く行うタイミングが、関係性の違いに影響されるかを明らかにする。

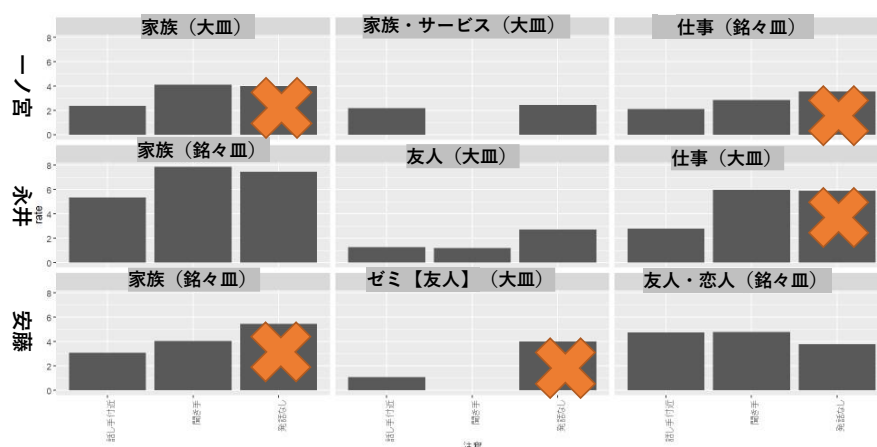
方法

R を用いて、対象データ収録開始 10 分後から始まる 5 分間における、協力者の各参加役割の別一分あたりの摂食行動回数を調べた。各協力者の一分あたりの摂食行動回数の結果をグラフ化し、同一関係性ごとに、協力者間で類似した特徴があるか分析した。

結果

各参加役割中の一分あたりの摂食行動回数は、図 1 の通りである。全体時間における参加役割総時間が極端に短いものは、データの欠損として切り捨てた。

図 1. 各参与役割中の一分あたりの摂食行動回数



考察

家族関係と仕事関係が話し手付近時より聞き手時の一分あたりの摂食行動回数が多かったのに対し、友人関係では聞き手時よりも話し手付近時の一分あたりの摂食行動回数が多いまたは同等であった。このことから、友人関係では、摂食行動と自発話を効率的に両立していると考えられる。

友人関係間でも摂食行動の結果は異なった。安藤のゼミ関係は年上の人物を含んだ共食であるのに対し、友人・恋人関係では全員が同い年であった。このことから、年齢差が関係性の違いとして摂食行動に影響を与えた可能性が考えられた。

関係性の違い以外に、食事形式の違いが影響していることが考えられた。永井の友人関係と安藤のゼミ関係は、大皿形式であり、安藤の友人・恋人関係は、銘々皿形式であった。同一関係性内での結果に違いがあることから、食事形式が摂食行動に影響を与える可能性が大きいと考えた。

○定量分析 2

目的

食事形式が協力者の摂食行動に与える影響を、食事場面全体における協力者の摂食の分布を調べることで明らかにする。

方法

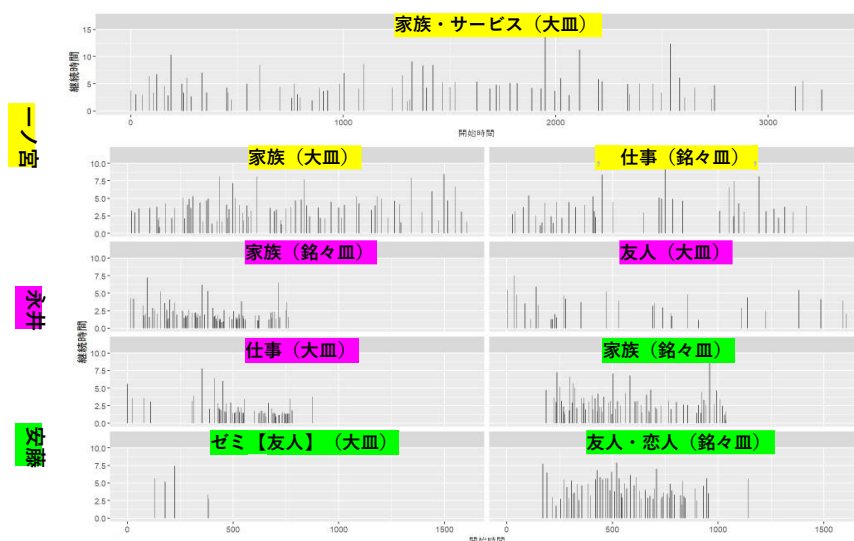
R で対象データ全体時間における摂食行動の分布を出した。

結果

各協力者の摂食行動の分布は、図 2 の通りである。

大皿形式のもので、一定時間摂食行動が見られないものが多かった。

図2. 協力者の摂食行動分布



考察

大皿形式は、会話が中心になることが多いため、また、食事が揃っていないため、摂食行動を中断する場合がありますと考えられる。

銘々皿形式は、会話を楽しみつつも取り分けられた食事を終える義務感があるため、食事に常に関与していると考えられる。また、食事が揃っているため、好きなタイミングで食べたいものを食べることができると思うこともできる。

主に大皿形式で、摂食行動が見られなかった時間に、協力者がとった行動を事例分析することで、協力者の摂食行動に与える影響の食事形式による違いを深掘りすることに繋げた。

○事例分析

目的

定量分析のみでは分からない、関係性や食事形式の違いがもたらす摂食行動への影響を調べることである。

方法

各対象データ内の協力者の摂食行動を、アノテーションを参考にしながら観察した。特徴的な行動を分析し、考察した。

(1)関係性の違いが見られた事例に関しては、永井の仕事関係、家族関係を観察した。(2)食事形式の違いは、大皿形式で摂食行動がない時間に協力者がとる行動に着目し、永井の仕事関係と安藤のゼミ関係を観察した。

結果

(1)関係性の違いが見られた事例

永井は、仕事関係の共食においては食べ物を口に入れるたびに話し手の方を向いており、また度々相槌を打っていた。しかし、家族関係においてはテレビの方を見るなど、仕事関係

ほど話し手の方をしっかりと見ていなかった。

(2)食事形式の違い

大皿形式にのみ見られた行動事例を3つ挙げる。

- ・大皿に盛られた焼き鳥を、取りやすいように串から外す事例
- ・外食時、新たな料理の注文をする際に参与者全員が摂食を中断する事例
- ・スマートフォンを参与者間で回して見ている事例

考察

(1)関係性の違い

永井にとって仕事関係においては、相手の発話に反応することや、話を聞いている姿勢を見せることが重要になっている可能性がある。摂食を続けながらも語り手の会話をよく聞き反応できるように、また、話を聞いている姿勢を示すためにこのような行動をしたと考えられる。反対に、永井の家族関係では他の参与者の方をあまり見ないことに加え、発話がなくても変わらず摂食を続ける様子があり、気を遣わないと考えられる様子が見られた。この事例は、関係性の違いが摂食行動に影響を与えたものと考えられる。

(2)食事形式の違い

大皿形式では、食事が常に揃っていないことで、取り分けられた食事を終える義務感がなく、会話のみを楽しむことができる反面、摂食を中断せざるを得ない不自由さがあると考えられる。これは銘々皿形式と大皿形式の違いである。

○全体考察

関係性の違いが摂食行動に与える影響はあると考えられる。家族関係では、気を遣わない摂食行動が見られた。仕事関係では、気を遣った共食への参与の仕方が見られた。友人関係では会話を中心に共食場面が成立し、摂食行動と発話を効率的に両立している場合があると考えられた。

食事形式の違いも、摂食行動に影響を与えると考えられる。大皿形式では、食事が常に揃っていないことで会話のみを楽しむことができる反面、摂食を中断せざるを得ない不自由さがあると考えられる。銘々皿形式では食事が揃っているため、食事への義務感がある反面、好きなタイミングで摂食をすることが可能だと考えられる。

しかし、対象データで収録された場面が、各場面の参与者同士の関係性のあり方を示していると考えられる。食事形式などの条件の違いも含めて、関係性の違いであると考えた。

○今後の展望

参与者の共食中の視線に着目した分析や、共食条件を統一した実験的状況下での共食会話の分析に発展することができると考えた。